

松島トミの伝承

大 谷 洋 一

- 目次
- 1、はじめに
 - 1) 語り手の紹介
 - 2) 聞き取りの状況
 - 3) 表記の方法
 - 2、オンネパシクル
 - 3、イヨンルイカ
 - 4、メノコユカラ
 - 5、おわりに

1、はじめに

調査が一問一答方式で進行すれば効率的であるが、「短い期間で聞き取りを終えて帰ろうとする態度は反感を買う」「よく知らない人間に、本当の事は喋らないもんだ」という主旨の忠告を、インフォーマントの紹介者から受けていた。意向を受けて、当初は細かいチェックリストを用意しなかった。インフォーマントになりうる人がどんな状況におかれているのか。どの分野の知識を持っていて、筆者にはどの程度まで語ってくれるのか。おおよそのフィールド現状をつかむため、初めての現地調査に入った。出会った古老のほとんどが、アイヌ語による物語を聞いて理解されたが、様々な事情のために、アイヌ語の知識を伝える環境にない人が多い現状である。

本報告は、門別町に口承される文芸3篇を報告するものである。

1) 語り手紹介

聞き取り調査には、門別町字豊田に在住する2人の姉妹に協力していただいた。

ここに収めた3篇の語り手は、妹の松島トミであり、1922(大正11)年の2月15日にカバリコタンで生まれる。一軒隣に住んでいる姉の厚別ナミは、1919(大正8)年4月8日生まれ。当地域のアイヌ語や生活について語っている。姉妹の父は海馬沢政二、母はマツである。

松島によれば、厚別川河口付近の厚賀町隣にある美原のあたりが昔のカバリコタンである。幼少時の住居は、囲炉裏を中心にして人が二重の輪をつくって踊れるほどボロチセ（大きな家）だったが、両親は子供達にアイヌ語を聞かせないようにしていたという。海馬沢一家は水耕畑作を広く営んでいたが、1936(昭和11)年に、鉄橋を渡る村人8人を巻き込む列車事故によって両親を失った。現在、平取町字去場に住む幼なじみは、「その時、泣きながらヤイサマ（即興歌）していた厚別さんの姿を忘れられない」と語っている。

当時は1歳から17歳の兄弟姉妹が5人おり、松島トミは次女で14歳の時であった。最年長の厚別ナミは、一家の大黒柱として働くことになり、夜中は乳を欲しがり泣き出す赤ちゃんをあやすため、寝る間もなかったと回想する。日中の子守は松島トミがまかされていたが、近所の古老と一緒にすごすことが多かったので、いくつもの物語を聞くことができた。その中で、特別の思いを込めて記憶していたのが、本報告にあるイヨソルイカ（子守歌）であると、松島は言う。姉妹は40歳代頃まで、近所の古老とヤイサマや踊りを楽しむ生活を過ごしていた。

北海道ウタリ協会門別支部が、1994(平成6)年9月4日に富川高台墓地において開いた供養祭で、筆者は初めてお会いして調査の協力を依頼した。平成3年度のアイヌ古式舞踊調査報告書(II)によれば、門別ウタリ文化保存会の顧問として、松島トミが歌で参加している。

2) 聞き取りの状況

1994年(平成6)年9月29日にイヨソルイカとメノコユカラを録音するが、久しぶりなため、語り手の松島は出来具合に不満をもらした。その2篇については、再び録音しなおす約束をした。翌30日、オンネパツクルとヤイサマを録音する。

同年11月30日にイヨソルイカとメノコユカラの再録音を行った。本報告では、語り手の希望により、11月に採録したイヨソルイカとメノコユカラをテキストにしている。オンネパツクルは、9月30日採録のものである。比較に必要な箇所については、語り手の承諾を得て、9月録音のテキストを部分的に使用する。

録音はいずれも、松島トミの自宅で筆者が行い、厚別ナミが常に同席している。9月30日だけは、平取町の幼なじみが加わっている。3篇の実演時間は、オンネパツクルが44秒、イヨソルイカが8分14秒、メノコユカラが13分3秒である。録音テープは北海道立アイヌ民族文化研究センターに保管されている。

3) 表記の方法

アイヌ語表記の方法は幾通りもあるが、現状では大勢を占めつつある方法として北海道ウタリ協会発行『アイヌ語テキスト1 アコイタツ』(1994.3.31)の凡例にはば従っている。

簡単に述べれば、カナ表記は聞こえた音を表し、そのまま読めば実際の音声に近く暗唱に役立

つ。ローマ字は簡易音素表記で単語ごとに区切っている、辞書の検索が容易である。

語り手が咳をしたりお茶を飲むために話を中断すると、前の句に戻ってやり直すことがある。同じ句が連続する場合などの理由を明らかにするため、【 】内に語り手の様子を示した。〈 〉内は、言い損ないなどである。()内の言葉は逐語訳などを補うためにあり、番号は訳注番号である。

本稿における3篇の表題は、すべて松島トミの呼称法を用いている。

2、オンネパシクル 年寄りカラス

(短文なので、あらすじは省略する)

オンネパシクル イーネ⁽¹⁾

onne paskur ine

タラタツワ イーサム

tara tak wa isam

ネータラ イーネ

ne tara ine

チエワ イーサム

ci=e wa isam

エチエルウェ イーネ

eci=e ruwe ine

チエオソマワ イーサム

ci=eosoma wa isam

ネーオソマワ イーネ

ne osoma wa ine

セタエワ イーサム

seta e wa isam

ネーセタ イーネ

ne seta ine

チロンヌカムイ ライケワ イーサム

cironnup kamuy rayke wa isam

ネーチロンヌイーネ

ne cironnup ine

ワッカサンワモムマ イーサム

wakka san wa mom wa isam

年寄りカラスどうした

俵を背負っていない

その俵どうした

私たちが食ってしまった

お前たちが食ってどうなった

私たちがウンコしてしまった

そのウンコしてどうした

犬が食ってしまった

その犬はどうなった

狐の神様が殺してしまった

その狐はどうした

(大) 水が出て流されてしまった

(1)他地域のオンネパシクルを聞かせる
と、松島はカバリコタンのを思
い出した。そればかりか、同席して
いた厚別はオンネチャペ onne
cape「年寄り猫」という替え歌をつ
くって歌っている。

ウワ⁽²⁾

uwa

知らない

(2)姉妹によれば、ウワ uwa「知らない」というのは、続きを忘れたのではなく「もう、おしまい」という意味を込めている。日常生活で普通に使われ、ぞんざいな意味はない。テープを聞くと、第一音節が高い。

3、イヨルイカ 子守歌(神謡の形態)

あらすじ

何でそんなに泣くの。親父のことが聞きたいのかい。それなら、泣かないで黙って聞きなさい。親父が日本に商いに行った後、私はお腹が痛くなり、苦しんだ末にお前を産んで、今まで育ててきたんだよ。ようやく、お前の親父が帰って来たけれど、カラスのとまってるような髪型の日本の女も一緒だったから、あまりにも腹立たしくて家出することにした。すると、日本の女も(本妻がいたことを知って)怒ってしまい手紙を書いて親戚を呼んだのさ。たくさんの日本人がやって来て、親父は談判された。戦争になり親父は負けて、財産を全部取られて船に積みこまれ、女も連れて行かれた。お前の親父は働きもしないでふて寝していたら、そこの所が地下に落ち込んでいなくなったんだと。

今いる和人もアイヌも、このような悪いことはするんじゃないよ。と話してオタスッに住む女が死んでしまったとき。

本文

フーワハウォー

V=huw wa hawo

ホロロロロ V⁽³⁾

hororo roro

ホロロロロ

ホロロロロ V

hororo roro

ホロロロロ

ネベチッカラ V

nep e=cis kar

何で泣いているんだい

エヌルスイ チキ V

e=nu rusuy ciki

お前が聞きたいなら

イテキ チシノ V

iteki cisno

泣かないで

エヌヤッ ピッカナ V

e=nu yak pirka na

聞いたらいいさ

(3)サケヘ(折節)は「フーワハウォー huw wa hawo」であり、「ホロロロロ hororo roro」ではない。サケヘから始められなかったことや息継ぎがサケヘの後にあることから、本編のサケヘの位置は各句末にあると判断した。「ホロロロロ」は舌の先をふるわずホロルセではない。知里真志保『知里真志保著作集 第2巻』1973年 p102参照。
元来はホロルセだったのが質問すると、「それは別のイヨルイカだ」と言った。これは、本篇に11回出るが、9月には17回出現した。冒頭の2句を除けば、同位置なのはたった2ヶ所である。物語が新たな展開を始めると、「第一幕が終わり第二幕に移る」ようなメリハリの効果が生まれると筆者は思った。

エオナ アナッ V

e=ona anak

トノコウイマム V⁽⁴⁾

tono kouymam

キワイサムワ V

ki wa isam wa

オカケヘタ V

okakehe ta

ホロロ ロロ V

hororo roro

アホニヒ アラカワ V

a=honihi arka wa

ヌワッ ユツケワ V

nuwap yupke wa

ヘコチャアンワ V

hekoca=an wa

ヘマカシ ホクサン V

hemakasi hokus=an

ヘサシ ホクサン V

hesasi hokus=an

ヘコチャアンワ V

hekoca=an wa

トゥッコカ レリコカ V

tutko ka rerko ka

ヘコチャアンワ V

hekoca=an wa

アエヌワッワ V

a=e=nuwap wa

タネタ パクノ V

tane ta pakno

アエレスワ V

a=e=resu wa

お前の親父というのは

日本に商いに

行ってしまつて

その後で

ホロロ ロロ

私の腹が痛くなって

お産がきつくて

私はもがいて

家の奥へ倒れて

炉の方へ倒れて

私はもがいて

二日も三日も

私はもがいて

私はお前を産んで

今まで

お前を育てて

(4) 9月に聞いたときは、この句の後、
シサムコウイマム sisam kouymam
「日本へ交易に行く」と対句があっ
た。松島によれば、「この男は熊の毛
皮を持って行った。対句で表現する
方がきれいだ」ということである。

エカンアン ルウェネ V⁽⁵⁾

ek=an an ruwe ne

ホロロ ロロ V

hororo roro

ホロロ ロロ V

hororo roro

シネアンパタ V

sine an pa ta

エオナアナッ V

e=ona anak

ヤンルウェネ V

yan ruwe ne

シサムメノコ V

sisam menoko

トノメノコ V

tono menoko

トゥラワ ヤンルウェネ V

tura wa yan ruwe ne

ホロロ ロロ V

hororo roro

サパハ キタイタ V

sapaha kitay ta

パックル レウパペコロ V⁽⁶⁾

paskur rewpa pekor

アンメノコ V

an menoko

トゥラワ ヤンルウェネ V

tura wa yan ruwe ne

ホロロ ロロ V

hororo roro

ウェンキンラネ V

wen kinra ne

イコヘタリ V

ikohetari

きたんです

ホロロ ロロ

ホロロ ロロ

ある年

お前の親父が

陸へ上がって来たのです

和人の女

日本の女を

連れて上がって来たのです

ホロロ ロロ

頭のとっぺんに

カラスが止まったように

いる女を

連れて帰って来たのです

ホロロ ロロ

気が狂ったように

(嫉妬のため) 憤慨して

(5)松島によれば、エカンアン ルウェネ ek=an an ruwe ne のところでアン an が連続しているが、後続のアン an も「私が」を意味する。付いても付かなくても意味に変わりがない。節のある語り物で、自動詞に第一人称接辞がある場合のみ、用いることができる虚辞のひとつであるらしい。人称接辞を示す「=」を最初のアン an に付けたのは、姉妹がくり返された方を余分とみているからである。付けなくてすむこと、付けない方が聞き手に誤解をまねかないことを承知しながらも松島が重複させるのは、「昔の年寄りがそう言って聞かせたからだ」と説明している。

(6)松島によれば、「(鳥が) 止まる」ことをレウ rew とは言わないで、レウパ rewpa と言うそうである。厚別は、「いっちょがえしという髪型で、タイソウ(大正)の時代に流行ったんだ。わしも結ったことある」と、手拭いで形を再現してくれた。結い方は、『広辞苑』にある「いっちょがえし」の説明と同じである。9月の録音では、アンメノコ an menoko 「いる女」に移ったところで、語り手も聞き手も吹き出して笑っている。ここを、特に高音で歌われる姿が滑稽であり、聞き所のひとつにしている。アイヌの口承文芸では、日本人男性のチョンマゲもカラスに見立てて表現することがある。知里真志保・小田邦雄『ユーカラ鑑賞』1956年元々社 p121参照。

ヤイケッテアン クス V

yaykeste=an kusu

アシケヘ アカラワ V

a=sikehe a=kar wa

イキアン ヒケ V

iki=an hike

シサムメノコ V

sisam menoko

トノメノコ V

tono menoko

イルシカキワ【咳】 V⁽⁷⁾

iruska ki wa

カンビヌウェワ V

kampi nuwe wa

ウタリウタル V

utari utar

ホトウイバカラワ V

hotuypakar wa

ホロロ ロロ V

hororo roro

シサムライトパハ V⁽⁸⁾

sisam ray topaha

ヤッパ ルウェネ V

yappa ruwe ne

エオナアナッ V

e=ona anak

アコチャランケ V

a=kocaranke

アコトゥミコロワ V

a=kotumi kor wa

イヤシンケレ V

iasinkere

アキレッネクス V

a=kirep ne kusu

私は家出するために

荷物を作って

いたところ

和人の女

日本の女が

怒って

手紙を書いて

彼女の親戚たちを

呼んで

ホロロ ロロ

日本人の大集団が

上陸したのです

お前の親父は

談判をされ

戦いを挑まれて

落とし前を取られ

せしめられたために

(7)姉妹によれば、日本の女が怒った理由は、男が本妻のいることを知らせずに連れて来たからである。手紙には、本妻が家出したことも書いた。

(8)9月にはこの句の前に、チャライシケへ cip ray sikehe「船のたくさんの荷物」の対句が入っていた。松島さんによれば、「船の荷物」とは、人間を含めての表現である。

チセオッタオカイペ V

cise or ta okay pe

ピリカ ヒケヘ V⁽⁹⁾

pirka hikehe

ホロロ ロロ V

hororo roro

チペンクテパワ V

cip esiktepa wa

シサムメノコ V

sisam menoko

トノメノコ V

tono menoko

アトゥライサム V

a=tura wa isam

オカケヘタ V

okakehe ta

エオナアナッ V

e=ona anak

ヘムイムイエワ V

hemuymuye wa

エ クンネ ヘネ V⁽¹⁰⁾

e kunne hene

エ トカッヘネ V

e tokap hene

モコロワアナイネ V

mokor wa an ayne

ホッケウシケワ V

hotke uske wa

ラオアフンワ V

ra oahun wa

イサムヤカイエ V⁽¹¹⁾

isam yak a=ye

ホロロ ロロ V

hororo roro

家の中にあった物の

良いところを

ホロロ ロロ

船をそれで一杯にして

和人の女

日本の女（も）

連れて行かれた

その後で

お前の親父は

ふて寝して

夜も

昼も

寝ていたあげく

横になっていた所から

地下へ落ち入って

しまったと言った

ホロロ ロロ

(9)松島によれば、持って行かれた財産はシントコ sintoko「行器」、パッチ patci「鉢」、エムシ emus「刀剣」、エッ ep「食物」、ミッ mip「着物」等である。

(10)句頭の エ e は、この行を5音節に整えるために発せられた音である。囃子言葉、もしくは長めの虚辞としての「ホロロ ロロ」を抜いて、節のある行は9月、11月共に総行数は62行である。5音節の行数を比較すると、いきなり演じた9月は30行で48.4パーセント、練習を重ねた11月は40行で64.5パーセントであった。これは、なるだけ5音節におさめようとする意志の現れであると思われる。

(11)9月はこの句の頭に、ライワ ray wa「彼が死んで」が付いていた。

ホロロ ロロ V

hororo roro

ホロロ ロロ

【ここから散文口調になる】

タネオカ シサムネヤッカ

tane oka sisam ne yakka

アイヌネヤッカ

aynu ne yakka

イテキエネアンウェンプリ

iteki ene an wen puri

(ソモ) エチコンナンコンナ⁽¹²⁾

(somo) eci=kor nankor na

今いる日本人であっても

アイヌであっても

このような悪い行いはしないように

⁽¹²⁾松島は後で ソモ somo を付け加えている。

お前たちは持たないのだぞ

と、おとしまえ取られるからって

オタストゥンマツ イソイタツワ⁽¹³⁾

otasutunmat isoitak wa

ライエワ イサムヤカイエ

raye wa isam yak a=ye

オタストゥンの女が話して

死んでしまったと言われている

⁽¹³⁾9月の語りで散文口調だったのは、「オタストゥンマツ ヤイエイソイタツしたと otasutunmat yayeisoitak SITATTO」だけだった。二度目の録音である本篇は、散文で戒めの言葉が付け加えられている。姉妹によれば、文芸ジャンルが何であれ、若者に対する教訓を最後につけたなら、「ウバツマ」であると話している。本篇は、イヨソルイカをウバツマしたということである。

4、メノコ ユカラ 女が演じる神謡

このメノコユカラは、二度にわたって演じてもらった。ほぼ同じ言い回しなのだが、お婆さんの遺言部分が異なり、登場人物が変わっている。11月に採録した本稿をメノコユカラAとよび、9月のものは遺言部分だけを本篇末に記載してメノコユカラBとよぶので比較してもらいたい。

あらすじ

一人の男の体験談である。

小さい頃の僕は、両親もなくて、何故この年寄りに育てられているのか分からずに暮らしていた。お婆さんは、歌いながら水汲みや料理をしていたが、僕が大きくなってみると、実は泣きながら歌っていたのであった。不思議に思っていたが、ある日のこと、お婆さんは大きな箱を取り

出してから、両親のいない理由を話し始めた。「お前の父母は夜襲があって殺されたが、私は臼の神に頼んでお前を隠してもらった。今までお前を育てていたが、私は年老いてしまって長くは生きられない。お前の父親が残した箱を開けてみなさい」と、言った直後に死んでしまった。僕は嘆き悲しんでいた。

ある日、箱を開けて見ると、弓矢と刀が束になって入っていた。感謝しながら、それを持って山に行った。初めての狩猟だったのに、熊や鹿を獲って山を下りることができた。川岸の木原にさしかかったところ、とても大きな泣き声が聞こえた。驚いたことに、裸の赤ん坊が捨てられているのではないか。赤ん坊を荷物の上に乗せて帰って大事に育てていた。

ある夜、何かの音に目が覚めると、抱いていたはずの赤ん坊がいない。赤ん坊は大きな狐になって、(食物を探すため)棚をかき回している。僕は怒りがこみ上げたが眠ったふりをしていると、狐は赤ん坊に化けて僕の懐に入ってきた。朝になったので、大きな鍋で湯を沸かし、赤ん坊を入れると、バタバタ暴れたあげく狐の姿に戻った。「お前を立派な神として先祖代々祭っていたが、人や神を欺く悪いことをした。これからは、神々の仲間として祭らないからな」と言っていると死んでしまった。ゴミ捨て場へ持っていき、「これからは、お前を祭らないぞ」と言いながら、ゴミや土と共に切り刻んでやった。今は、野良狐がたくさん増えて、あいかわらず悪いことばかりしている。

本文 メノコユカラA

ホレイイ、 ホレ、
V=hore ii, X=hore

VX イレスフチ

i=resu huci

育ての婆さん

X イレスサポ⁽¹⁴⁾

i=resu sapo

育ての姉さんが

(14)姉妹によれば、イレスサポ i=resu sapo 「私を・育てる・姉」は年寄りであっても、自分を育ててくれる女性に対して用いる言葉である。

V イレスキワ

i=resu ki wa

僕を育てて

V オカアニケ

oka=an hike

暮らしていたところ

V イレスフチ

i=resu huci

お婆ちゃんは

V ワッカタヒケカ

wakkata hike ka

水汲みの時も

V シノッチャキコロ	sinotcaki kor	歌いながら
V ワッカタ	wakkata	水を汲み
V スケヒケカ	suke hike ka	煮炊きする時も
V シノッチャキコロ	sinotcaki kor	唄いながら
VX スケヒ	suke hi…	料理すること（であった）
V マカンペクス	mak an pe kusu	どういふわけで
V ウヌカサッペ	unu ka sak pe	母さんもない者
V オナカサッペ	ona ka sak pe	父さんもない者が
V アネワ	a=ne wa	僕であって
V イレスフチ	i=resu huci	育てのお婆さんが
V イレスキワ	i=resu ki wa	僕を育てて
V オカアニカ	oka=an hi ka	暮らしてる事なのか
V アエランペウテッ	a=erampewtek	僕はわからなかった
V 【咳】ポロアンワ	poro=an wa	大きくなって
V インカラニケ	inkar=an hike	みたところ
V チシコロ ワッカタ	cis kor wakkata	泣きながら水を汲み
V チシコロ スケヒ	cis kor suke hi	泣きながら料理をすること

- V ネアアンワ⁽¹⁵⁾
ne aan wa
であって
- V イヨクンヌレアンコロ
iokunnure=an kor
不思議に思いながら
- V アナナイケ
an=an ayke
いたのだが
- V シネアントタ
sine an to ta
ある日
- V イレスフチ
i=resu huci
育てのお婆さん
- V イレスサポ
i=resu sapo
育てのお姉さんが
- V <ポロシント…>⁽¹⁶⁾
<poro sinto…>
ポロスウオッ
poro suwop
大きなシント…
大きな箱を
- V サンケルウェネ
sanke ruwe ne
出したのでした
- V 【言いよどみ】ヤオウサッ⁽¹⁷⁾
<ray…> ya o usat
炉縁のオキを
- V レボマレ
rep omare
沖へ押しやり
- V レボウサッ
rep o usat
沖のオキを
- V ヤオマレ
ya omare
炉縁に引き寄せ
- V 「アコロソントッ
“a=kor sontak
「私の可愛い子よ
- V イタカニケ
itak=an hike
私の言うことを
- V ピッカノ
pirkano
よく
- V エヌヤッ ピリカナ
e=nu yak pirka na”
聞くのだよ。」

(15)松島によれば、お婆さんが泣きながら水を汲んだり料理をしていることに、幼い頃の主人公はまったく気づいていなかった。

(16)シントコと言いかけたが、言い誤りに気づいて言い直したのだと思う。

(17)9月には、この句の前にアベエトッタ アヌ ワ ape etok ta anu wa「炉の横座に置いて」という句が入っていた。イレスフチが炉のおきをいじっている様子は、これから大事な話を始めようとする前触れの描写である。松島によると、昔は「助けてくれたニスカムイを祭りなさい」というせりふが遺言に入っていた。

V	セコロ ハウェアンコロ sekor hawean kor	と、言いながら	
V	「エオナハ アナッ ⁽¹⁸⁾ “e=onaha anak	「お前の父さんは	(18)同じ物語を9月と11月に録音させてもらったつもりだったが、イレسفチのせりふが異なり、イレسفチの正体まで変容している箇所である。本篇文末のメノコユカ ³ Bと比較してもらいたい。
V	【長い咳】トパットゥミ アンワ topattumi an wa	夜襲があって	
V	アライケワイサム a=rayke wa isam	殺されてしまった	
V	エウヌフカ e=unuhu ka	お前の母さんも	
V	アライケワイサム a=rayke wa isam	殺されてしまった	
V	ネンボカ nen poka	なんとか	
VX	アエシッヌレルスイクス a=e=siknure rusuy kusu	私はお前の命を救いたいから	
V	ニスカムイ nisu kamuy	白の神様	
V	ニスフチ nisu huci	白のお婆さんを	
V	【言いよどみ】アウッセレワ ⁽¹⁹⁾ 〈aep, aop〉 a=upsere wa	私はふせて	(19)筆者が「ふせる」のアイヌ語を聞くと、厚別は「ブセレだもウッセレだべさ」と答えた。
V	チョロポッケ アオマレワ corpokke a=omare wa	その下に入れて	
V	【咳】『ネンボカ “nen poka タン イワタラッ tan iwatarap	『なんとか この赤ん坊を	
V	シッヌレワ siknure wa	救って	
V	イコレヤン』 i=kore yan” ハウエナンコロ hawean=an kor	ください』 と言いながら	

V 【ため息】 ニスカムイ

<HAA HAA> nisu kamuy

白の神に

V アコイタツカラワ

a=koitakkar wa

私が言って

V 【言いよどみ】 タネタパッノ

<A AE A> taneta pakno

今まで

V アエレスワ

a=e=resu wa

私がお前を育てて

エカンペネクス

ek=an pe ne kusu

きたものだった

V オンネ ネマヌッ

onne ne manu p

老人という者は

V コテケハイエワ⁽²⁰⁾

koteke haye wa

寿命がなくて

V カムイネアン⁽²¹⁾

kamuy ne an

死んでしまう

アナンルウェネクス

an=an ruwe ne kusu

そういうことだから

V エオナハ

e=onaha

お前の父さんが

V ホッパ スウォッ⁽²²⁾ 【言いよどむ】

hoppa suwop <taptap>

残した箱の

V プタ エウッワ

puta e=uk wa

蓋を取って

エヌカンナンコンナ」

e=nukar nankor na”

見てごらんなさい」

V ハウエアン テッコロ

hawean tek kor

言った直後に

V 【咳】 カムイネアンワイサム

kamuy ne an wa isam

死んでしまった

V チサンコロ

cis=an kor

僕は泣きながら

②①録音が聞き取れないので後で松島に聞くと、コテケ koteke「命」ハイエ haye「もたない(続かない)」ワ wa「だから」と答えた。目新しい語彙である。ここは9月には アキネクス「私はするものなので」の句だった。

②②松島は「アイヌは、死ぬって言えば、カムイになるって言うからな。納まるところに納まるってことだ。」と説明している。

②③ホッパ スウォッタ hoppa swop puta「残した・箱・ふた」と言うつもりだったが、言いよどんだらしい。タッ tap「たった今」をくり返したのではないと松島が言った。

V	アナンアンコ ⁽²³⁾ カ an=an an korka	いたけれども	(23)よく聞きとれないので松島に尋ねると、アナンアンコ ⁽²³⁾ カ an=an an korka「いたけれども」と答えた。ここでも人称接辞が重複され、「言っても言わなくてもいい」と言われる後続のア ⁽²³⁾ n an は常に手前で声門閉鎖されている。
V	シネアントタ sine an to ta	ある日	
V	スウォップタ アウ ⁽²³⁾ ワ suwop puta a=uk wa	箱の蓋を取って	
V	インカラニケ inkar=an hike	見たところ	(24)松島によれば、昔の年寄りも日本語で ヤ YA 「矢」と言っていたそうである。
V	【言いよどみ】ヤネヤ ⁽²⁴⁾ ッカ 〈suwop su AAYA〉 YA ne yakka	矢でも	
V	クネヤ ⁽²⁴⁾ ッカ ku ne yakka	弓でも	
V	エムシネヤ ⁽²⁴⁾ ッカ emus ne yakka	刀でも	
V	ポロイキリヒ poro ikirihi	大きな束になって	
V	オマルウ ⁽²⁴⁾ エネ oma ruwe ne	入っていたのである	
V	イヨクンヌレアンコ ⁽²⁴⁾ ロ iokunnure=an kor	僕は驚いて	
V	オンカミアンコ ⁽²⁴⁾ ロ onkami=an kor	礼拝すると	
V	ヤ アコ ⁽²⁴⁾ ルワ YA a=kor wa	矢を持って	
V	エムシ アコ ⁽²⁴⁾ ルワ emus a=kor wa	刀を持って	
V	エキムネアンルウ ⁽²⁴⁾ エネ ekimne=an ruwe ne	狩に行ったのです	
V	イネア ⁽²⁴⁾ ックス ine ap kusu	どうしたもので	
V	イソ ⁽²⁵⁾ ンアナカ ison=an ya ka	獲物があったのかも	(25)松島によれば、獲物があったのはニスカムイに見守られていたからである。
V	アエランペウテ ⁽²⁵⁾ ク a=erampewtek	僕はわからない	

- V アエラミシカリ
a=eramiskari 僕は経験がない(のに)
- V ユクネヤッカ
yuk ne yakka 鹿でも
- V カムイネヤッカ
kamuy ne yakka 熊でも
- V ボロイキリヒ
poro ikirihi 大猟で
- V アシケヘ アカラワ
a=sikehe a=kar wa 僕は荷を作って
- V 【お茶を飲む】アシケヘアカラワ
a=sikehe a=kar wa 僕は荷を作って
- V サナンルウェネ
san=an ruwe ne 山を下りたのでした
- V サナンホントムタ
san=an hontom ta 下がる途中で
- VX ナイケナシカタ
nay kenas ka ta 沢の木原の上に
- VX ウ チッコワイセ
u cis kowayse ひどく泣き騒いでる
- VX ウ チッハウエヘ
u cis hawehe 泣き声(が聞こえる)
- V イヨクンヌレアンコロ
iokunnure=an kor 僕はビククリして
- V アシケヘ アアヌワ
a=sikehe a=anu wa 自分の荷物を置いて
- V ヘヘイパアナクス
heheypa=an akusu 覗いてみたら
- V アトゥサ イワタラッ
atusa iwatarap 裸の赤ん坊が
- V アオスラワ アンルウェネ
a=osura wa an ruwe ne 捨ててあったのだ
- VX イヨクンヌレアンコロ
iokunnure=an kor ぶったまげて

V	イワタラッアウッワ iwatarap a=uk wa	赤ちゃんを拾って
V	アシカオマレワ a=sikaomare wa	自分の荷の上に乗せて
V	サナンルウェネ san=an ruwe ne	山を下りたのである
V	アウニタ シレパアンワ a=uni ta sirepa=an wa	家に帰ってから
V	イワタラッ【咳】アレスワ iwatarap a=resu wa	赤ちゃんを育てて
V	オカアニケ oka=an hike	暮らしていたところ
V	アトゥマムワ a=tumam wa ホッケアンランケコロ hotke=an ranke kor	僕は抱いて いつも添い寝して
V	アナナルウェネ an=an ruwe ne	いました
V	シネアンチカッタ sine ancikar ta	ある夜
V	ネッフムオッタ nep hum or ta	何かの音に
V	インカラニ【咳】 ⁽²⁶⁾ inkar=an hi ネッフムオッタ nep hum or ta	見たとき… 何かの音に
V	モサンワ mos=an wa	目をさまして
V	インカラニケ inkar=an hike	みたところ
V	アウッソロタ a=upsoro ta	僕のふところに
V	アトゥマム イワタラッ a=tumam iwatarap	抱いてた赤ちゃんが

②⑥インカラニケ inkar=an hike「みたところ」と言うつもりだったが、その前段階の言葉を思い出してやり直されたと筆者は思う。

	イサムワ		
	isam wa		いなくなつて
V	イワタラッ		
	iwatarap		赤ちゃんが
	ポロチロンヌッ		
	poro cironnup		大きな狐の
	カムイネアンワ		
	kamuy ne an wa		神となつていて
VX	サンカトソソ ⁽²⁷⁾		⑦⑧サンカトソソ san ka tosooso「棚・上・荒らす」である。サンには「台所」の意味もあるのか質問すると、松島は「サンカトソソだから、ダイドコでしょ。他、棚ないもの、昔なんか」と答えた。棚の上は食物の入った鍋などが置いてあると言う。
	san ka tosooso		棚の上をかき回し
V	シットソソ		
	sir tosooso		ひどく荒らし(て)
V	アンルウェ アヌカラワ		
	an ruwe a=nukar wa		いるのを見て
V	ウェンキンラネ		
	wen kinra ne		ものすごい怒りが
V	イコヘタリ		
	ikohetari		沸き起こつた
V	キアヤッカ		
	ki a yakka		のだが
V	ソモアヌカラペコロ		
	somo a=nukar pekor		見なかったように
V	モコロアナペコロ		
	mokor=an a pekor		眠っていたように
V	アナンワ		
	an=an wa		僕はいて
V	シリペケリ アテレワ ⁽²⁸⁾		⑧松島が男の行動に対して「狐の姿になつての見たら殺されるもの、頭いいもんだな」と評価すると、厚別もうなずいた。
	sirpeker hi a=tere wa		朝を待つて(いたら)
V	ネアチロンヌッカムイ		
	nea cironnup kamuy		その狐の神は
V	イワタラッネアンワ		
	iwatarap ne an wa		赤ちゃんに変身して
V	アウッソロホ		
	a=upsoroho		僕のふところ(に)

V	オアフンルウェネ oahun ruwe ne	入ってきた
V	【咳】シッペケリ sirpeker hi	明るくなるのを
	【言いよどみ】アテレワ 〈a=tur〉 a=tere wa	待って
V	ホプニアンワ hopuni=an wa	起きてから
	アペアリアンワ apeari=an wa	火をたいて
V	ポロス poro su	大きな鍋を
V	アアッテワ a=atte wa	かけて
V	スポッワ su pop wa	鍋（の中）が煮立って
V	アエラマンペネクス a=eraman pe ne kusu	（それが）わかったので
V	イワタラッ iwatarap	赤ん坊を
V	アキッマワ a=kisma wa	つかんで
V	【言い誤り】ポッスオルン 〈pon〉 pop su or un	煮立つ鍋の中へ
	アオマレルウェネ a=omare ruwe ne	入れてしまったのである
V	ホチカチカ hocikacika	手足をバタバタさせ(て)
V	ホテヤテヤ ⁽²⁹⁾ hoteyateya	暴れた
V	キアイネ ki ayne	あげく
V	ポロチロンヌッ poro cironnup	大きな狐の

②⑨松島によれば、ホテヤテヤ ho-teya-teya「バタバタさせて暴れる」であり、ホチカチカ ho-cika-cika「尻をバタバタさせる」と意味はまったく同じだという。目新しい語彙である。

- カムイネアンワ
kamuy ne an wa 神（の姿）になってから
- V アコイタツカラコロ
a=koitakkar kor 僕は言った
- V 「カムイエネ 【咳】
“kamuy e=ne 「お前は神として
シンリッオロワノ
sinrit orowano 先祖から
- V アノミカムイ
a=nomi kamuy 私たちの礼拝する神
- V アノミピト
a=nomi pito 私たちの祭る神が
- V エチネアナ
eci=ne a na お前たちであったのだぞ
- V アイヌコスンケ
aynu kosunke 人間をだまし
- V カムイコスンケ
kamuy kosunke 神を欺くことを
- V エキワクス
e=ki wa kusu お前はしたのだから
- V 【ため息】（カムイネナアン）⁽³⁰⁾
〈HAA kamuy ne na an?〉
カムイネ
kamuy ne 神様として
- V エキカソモキナンコンナ」
e=ki ka somo ki nankor na” お前を祭らないぞ」
- V セコロハウエアナンコロ
sekor hawean=an kor と言いながら
アコイタツカラコロ
a=koitakkar kor 僕が言いながら
- V ライワイサミ
ray wa isam hi 死んでしまったことを
アエラマンワ
a=eraman wa わかったから

⁽³⁰⁾ここで言い誤り、すぐに言い直したと思われる。9月録音では、カムイエウタンネ kamuy ewtanne「神の仲間になる」の句が入っていた。

- V ポロス
poro su 大きな鍋を
- V アヤンケワ
a=yanke wa (火から) 下ろして
- V ミンタラオッタ
mimtar or ta ごみ捨て場に
- V 【咳とため息】 アアニワ
(AHAN HAAA) a=ani wa 持って (行き)
- V 【咳】 アコイタツカラコ
(IYAIYA)a=koitakkar kor 言いながら
- VX アムンコタタ⁽³¹⁾
a=munkotata ゴミと共に切り刻んで
- V アトイコタタ
a=toykotata 土と共に切り刻んで
- V 「アノミカムイネアナ」
“a=nomi kamuy ne anak 「我らの祭る神としては
- V ソモキナンコンナ」
somo ki nankor na” しないつもりだぞ」
- V セコロ ハウェアナンコロ
sekor hawean=an kor と僕は言いながら
- V アトイコタタ
a=toykotata 土と共に切り刻み
- V アムンコタタ
a=munkotata ゴミと共に切り刻み
- V キワイサムワクス
ki wa isam wakusu してしまったから

③松島によれば、ここでのミムタラ mimtar「庭」は「ゴミ捨て場」のことをさす。その場所で、タウキ tawki「(ナタなどで) ~をたたく」するためにゴミが混入することになる。主人公が使った刃物はナタであり、ナタのアイヌ語はついてなかった。本篇はサルプトゥンクル sar-put-un-kur「沙流の河口にいる人」の話である。筆者が「メノコユカラを男が演じたら、何と呼ぶのか」質問すると、姉妹は大いに笑われ「女がやるからメノコユカラだ」と言った。

今、野良にキツネいっぱいいるんだと。カムイに祭られないで。はあ、何だかこわくて、さっばりだめだな、こりゃ。

メノコユカラB (9月録音「育ての婆さんの遺言部分」を抜粋)

- V アッヌマ アナッネ
asnuma anakne 私は

- V ニスカムイ
nisu kamuy 臼の神
- V ニスフチ
nisu huci 臼の婆さん(が)
- V アネルウエネ
a=ne ruwe ne 私であって
- V イワタラッネ エアニタ
iwatarap ne e=ani ta お前が赤ちゃんのときに
- V トパットゥミ
topattumi 夜襲が
- V アンルウエネワ
an ruwe ne wa あったので
- V エオナハカ
e=onaha ka お前の父さんも
- V エウヌフカ アライケワ イサム
e=unuhu ka a=rayke wa isam お前の母さんも殺されてしまった
- V クス【咳】アライケ エトコタ
kus a=rayke etoko ta (ので) 殺される前に
- V ニスウッセレワ
nisu upsere wa (彼らは赤ちゃんに) 臼をかぶせて
- V 『ニスフチ ニスカムイ
“nisu huci nису kamuy 『臼のばあさん、臼の神様
- V タパン ワラシ
tapan WARASI この子供
- V タパン イワタラッ
tapan iwatarap この赤ちゃんを
- VX【咳】シッカシマワ イコレ』セコロ
sikkasma wa i=kore”sekor 預かって下さい』と
- X 【言いよどみ】言われたんだと。ふふふふっ【お茶を飲む】
- VXアエシッカシマワ
a=e=sikkasma wa 私はお前を預かって

V 【聞き手がちゃちゃを入れて中断する】

タネタパッノ

tane ta pakno

今まで

V アエシッカシマ

a=e=sikkasma

私はお前を預かって

V アエレスワ エカソルウェネ

a=e=resu wa ek=an ruwe ne

私はお前を育ててきたのです

(以下省略)

5、おわりに

メノコユカラのA(11月録音)とB(9月録音)について、若干のコメントを述べてまとめた。メノコユカラBの遺言において、「育ての婆さん」は自らを「臼の神」と名乗り、両親に赤ん坊のめんどろを頼まれて育てていたことを明かしている。伝承者の説明によれば、「臼の神は両親に大事にされていたので、赤ん坊のめんどろをみようとして人間の姿になった。」というようなことであった。

約2カ月後に語ったメノコユカラAにおいては、「育ての婆さん」が「臼の神」に赤ん坊のめんどろを頼んでいる。「臼の神」は赤ん坊を隠す役目を果たしているにすぎない。メノコユカラAでは、「育ての婆さん」と「ニスカムイ」は別の存在になっている。「育ての婆さん」の正体を伝承者にたずねると、「夜襲の時に両親が防戦している間、本当の孫婆さんが赤ちゃんを臼の下に入れて、自分も臼の裏に隠れて助かった。だから、『臼の神』も祭りなさいって、言うんだわ。」という主旨の説明をしている。

物語の配役が変移した現象には、いくつかの理由が考えられる。伝承者は、この物語を「カバリコタン内の複数の古老から聞いている」と言っていたので、元々、複数の物語展開を覚えていたのかもしれないし、別の物語の記憶が挿入されたとも考えられる。または、はずみでズレが生じてしまったが、豊富なアイヌ語の知識を発揮して人称接辞を乱すこともなく、修復しながら結末に導いたのかもしれない。ここで注目しておきたいのは、配役が変わっていてもどちらか一方を言い間違えたということもなく、変移したとおりの詳細な解説を付け加えられたことである。伝承者は、筆者に聞かせることができる話は、イヨソルイカとメノコユカラの2話と言っている。(オンネパシクルは、聞き取り中に思い出されたものである)つまり、伝承者はメノコユカラAとメノコユカラBを同じ物語と認識している可能性がある。

本篇のメノコユカラは、他人を介在させることなく伝承者自らが物語の変移に積極的に関わっていることをうかがわせる例として貴重なものと筆者は考えている。

末尾になったが、貴重なお話をお聞かせいただいた松島トミさんと厚別ナミさんのご指導とご協力に、記して心から感謝申し上げたい。